

■ 書 評



思索と想い —精神医学の小径で—

神庭重信 著
慶應義塾大学出版会
2014年5月 434頁
本体価格 3,700円+税

本書は、日本の精神医学を力強く牽引して頂いている神庭重信氏による深い思索の書である。九州大学精神医学教授就任10周年、また著者がちょうど60歳になった節目に刊行された記念碑的作品で、現在の精神医学が抱えている方法論をはじめとした諸問題に対する鋭い見解が、慎重に選びぬかれた平明な言葉で明晰に叙述されている。いくつか紹介する。

「高度に自然科学化した医学がこのように輝かしい成果を収めた20世紀は、皮肉にも自然科学では人の病苦のすべてを解決できないことが見えてきた世紀である」、「患者は、こころを持つ個人とし社会的に存在している、尊厳をもって生命を全うすべき存在である」。

遺伝子解析に代表される最先端の研究により、生物学のアプローチの限界が皮肉にも浮き彫りになったという言葉は、リチウムの作用機序をはじめ生物学的精神医学の領域で国際的な成果を多数だしている著者の言葉だけに説得力がある。

一貫してうつ病、双極性障害を主要な研究対象にし、うつ病の「治療ガイドライン」の作成を推進した著者は、治療についても重要な指摘をしている。

「双極性障害に対する薬物療法にはおのずと限界がある一方で、非薬物療法の研究が十分に行われていない」、「(双極性障害の)疾患概念の拡大とともに、過剰診断と過剰処方広まりはしないか、という一抹の不安もある」。

2011年に(臨床精神医学の特集号で)表明された過剰診断、過剰処方の危惧はまさに正鵠を射ており、今日、精神疾患全般に及び、遺憾なことにあらたな多剤併用の時代に突入しているという感をぬぐえない

この著作では、自らの精神史も語られており、初め

て知る神庭氏の幅広い人文学的教養と深い信仰に驚かされる。魂の師は「神を畏れ、人を恐れない」迫力ある生き方をした内村鑑三であるという。「ベルクソンに惹かれて魂の存在を認めてみたくなる」と述べた晩年のベルクソンの境地への共鳴の言葉には、ベルクソンの思想に対する深い理解が窺われる。そうした思想的背景を知ることによって、氏が公的場面で意欲的に展開している学説に対する理解が一層深まる思いがする。

とりわけ本書では、普段目にすることがない教会関係の雑誌に掲載された論考が加筆・修正され、宗教の視点からの著者の治療観に接することができる。

「人を助けることは、人が人らしく在ることです」、「人生においてつねに謙虚であり、弱きもの、小さきもの、病めるもの、の隣人となった善きサマリア人でありたいと思います」。

患者に対する治療行為、ないしケアの行為には魂の癒しの側面があり、その行為によって医師自身が「人らしく在る」という堅固な洞察は、敬虔な信仰に裏打ちされた著者ならではの高い境地を指し示すことだろう。このような患者に対する謙虚な祈りの姿勢は、薬物療法一辺倒になりがちな現代の日々の臨床において、また、サイコオンコロジーの領域において示唆に富む。

「科学と信仰は共存できると思っている」という印象的な言葉にあるように、科学者としての著者は同時に信仰の人でもある。評者はかねがね、同じキリスト教の影響下にある研究者や思想家、医師でも、カトリシズムとプロテスタンティズムの出自では思想的に少なからぬ違いがあることに関心をよせている。例えば既成の宗教の枠を脱構築して大胆な思想を展開したジャック・ラカンはカトリシズム、一貫して信仰の姿勢を保持して誠実かつ謙虚に思索を続けたヤスパースはプロテスタンティズムの系譜にそれぞれ属す。この観点からみても本書は興味深い。かつて人間学的精神医学が強調したように、精神科医は必然的に「哲学する」ことを要請される立場にあると思う。本書を読むと神庭氏は果敢に「哲学する」医師であることがよくわかる。現代の医学、精神医学の方位を吟味する上で是非参照していただきたい含蓄に富む著作である。

(加藤 敏)